

子どもの表現指導に関する研究

～幼稚園教育要領領域「表現」にみる表現指導観について～

今村 方子*・野波 健彦**

A Study of Teaching Children How to Express Themselves:
With Special Reference to a View on Teaching Expressed by
the Concept 'Expression' In the Course of Study for Kindergarten

Masako IMAMURA* and Takehiko NONAMI**

(Received December 1, 1997)

Abstract

It is difficult to say that teaching method of expression has been appropriate when we look at problems of children's expression. The study attempts to propose an alternative method of teaching by recognizing what the teaching of expression should be from a standpoint of both human development and activities of expression. As one of its processes this paper examines a view on teaching found in the concept 'expression' in the course of study for kindergarten.

キーワード／子ども、表現指導、幼稚園教育要領領域「表現」、表現能力の発達過程
Key words : Children, Teaching of Expression, 'Expression' in the Course of
Study for Kindergarten, developmental Process of the Ability to
express

はじめに

マスコミにより日夜報道される現代の子どもたちの人やものに関わる問題傾向は、日々劣悪化することはあっても改善される可能性は極めて厳しい状況下にあると言っても過言ではあるまい。筆者らには、日本におけるこれまでの表現指導のあり方もその一因と思えてならない。何故ならば、これまでの表現教育は芸術作品を表現(再現)する力量は養成し得ても、学習者自らが持つ表現欲求の満足や伝達としての表現手段の獲得・自己の主体性に基づく表現創造の力量育成としての教育はしてこなかったからである。

したがって、教育現場の子どもたちは、表現の為の知識や技術を獲得することはできても、自己表現の手段や自己伝達・他己理解・自己実現のための表現力を獲得することはできなかったのである。教師主導による表現学習のなかでは、子どもたちは自身の感情や意

*山口芸術短期大学幼児教育科 **山口大学教育学部音楽教育

志を伝達しあうための表現やその共有のあり方を学ばなかったのである。また、集団で互いに工夫しあって新たな表現創造をする喜びも学ばなかったのである。すなわち、これまでの表現指導は、子どもの内面を育てる、子どもの心を育てる情操教育をしてこなかったのだと言えるのではないだろうか。

先般中央教育審議会は、「生きる力」と「創造性」を21世紀を生きる子どもたちに必要な力として答申した。これは、「子どもたちが主体的・創造的に生きていくことができる資質や能力を育成する」¹ことを目的としている。表現指導の立場に置き換えてみると、子どもたち一人ひとりが主体として表現し、新たな自己実現をめざす創造性ある人間となるための表現指導のあり方が問われていると言ってよい。伝達力・自己表現力回復のための表現指導が必要とされている。

以上のような問題意識に立ち、本研究は、表現指導の基本となる文部省幼稚園教育指導要領領域「表現」について、その目標・ねらい・内容等を人間の成長発達の視点から分析・考察する。さらに、領域「表現」の問題点と課題の整理をも試みる。

1. 幼稚園教育要領領域「表現」にみる子どもの表現指導観

1) 領域「表現」のねらいにみる子ども観

平成元年告示、平成2年4月1日から施行された幼稚園教育要領は、「幼児を取り巻く家庭教育、生活環境、社会環境の変化、子どもの発達の状況の変化、幼稚園就園者の増加、家庭の教育機能の低下、幼児教育の場の増大等幼稚園教育を進めていく上での諸条件の変化」に対応するもの、また、幼児期の特性を「①親や周囲の大人に保護され、依存していた状態から、自分と外界との区別を認識し、自己存在感の拡大・充実を求める時期、②家庭での生活を基盤としながら、より広い社会生活を経験し始め、友達との交わりを求め、その喜びや葛藤体験の中で社会性が著しく発達する時期、③生活や遊びの中で、人間に対する信頼感、自発性、意欲、豊かな感情、物事に対する興味・関心、思考力、表現力、運動の能力等の基礎が培われる時期」ととらえ、このような生涯学習体系の観点からそれを守り育てるための保障を目的として作成された²。

また、幼稚園教育の基本として、(1)幼児の主体的な生活を中心に展開されるものであること、(2)環境による教育であること、(3)幼児一人一人の発達の特性及び個人差に応じるものであること、(4)遊びを通しての総合的な指導によって行われるものであること、の4項目を掲げている。そして、幼稚園教育の目標として幼稚園修了までに幼児の中に育つことが期待される心情・意欲・態度などを、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域にまとめて掲示している。

感性と表現の領域としての「表現」は、豊かな感性を育て、自分が考えたことを表現しようとする意欲と創造性を養うことに関するねらいとして以下の3項目を掲げている。

- (1)ものの美しさに対する豊かな感性をもつ。
- (2)感じたことや考えたことを様々な方法で表現しようとする。
- (3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

(1)は美的感性の育成(心情)に関するもの、(2)は表現意欲の形成(意欲)に関するもの、(3)は表現を楽しむ生活態度(態度)に関するものである。

急激な社会の変化に対応して行ける豊かな感受性を基盤に、自身が考えたことを主体的に表現しようとする意欲をもち、高度情報化社会の波のなかでも個性ある創造的な人間として生活を楽しむことができるような人間形成の基盤を育成しようとしている。

2) 内容にみる学力観

一般に学力の構成要素は、〈関心・意欲・態度〉、〈思考・判断〉、〈技能・表現〉、〈知識・理解〉とされている。この学力観をふまえながら内容をふりかえてみる。

なお、〈関心・意欲・態度〉は他の学力との相関関係において形成されるものと考えられるので、ここでは一応学力から外しておきたい。

まず、内容分析の前に子どもが自己イメージに基づき獲得した表現手段を操作し表現するまでの過程について触れておきたい³。

子どもは、子どもの五官や筋肉感覚による感覚的・身体的反応をとおして人やもの（環境や文化）と関わり、自己イメージを表現するための基礎的な感性となる〈技能・表現〉力（かんじる力）を獲得する。これが表現力の第一の過程である。第二の過程として、感覚的・身体的反応をとおして獲得した感覚は（かんじた心は）、知覚をとおして認識され、自分が表現行動（表出行動）を起こした要因を〈知識・理解〉する力（わかる力）となる。さらに、第三の過程として、自身の反応をひき起こした表現素材に対する〈知識・理解〉力はそれを用いて自己イメージを表現しようとする道具となり、ここに至って子どもの主体に基づく表現行為が確立する（子どもの個性化／できる力の獲得）。また、子どもたちの表現する場は個と集団からなる場である。各々の子どもの個性ある表現の伝え合いの場は、互いの表現手法の交換の場となる。そこからそれまでには知ることのなかった他の表現手法が各々に獲得される。すなわち子どもたち一人ひとりに新たな表現の創造行為が生まれる（自己実現のよるこびが達成される）のである。また同時に、個の表現は集団のなかで一般化（社会化）され、集団としての新たな表現の創造も営まれるのである。これが第四の過程である。このような過程を経て子どもの主体に基づく表現は成立する。そしてこのような表現行動は螺旋的に繰り返されるのである。そうして、子どもは学習集団の場で個性ある表現を確立することができる（表1参照）。

以上をふまえながら表現力獲得に必要な学力を整理すると以下のように考えられる。

- (1) 表現素材としてのものと関わり、感覚的・身体的に反応する力の獲得
（「技能・表現」）
- (2) 感覚的・身体的反応をとおして表現素材を認識する力の獲得
（「知識・理解」）
- (3) 認識した表現素材に自己イメージに関わらせ表現する力の獲得
（「思考・判断」）
- (4) 認識した表現素材を使って友だちと新たな表現を創造する力の獲得
（「創意・工夫」）

表1 子どもの表現行動と教師の関わり

表現行動の発達		教師の関わり	獲得される学力
第一段階	表現欲求の満足 (音楽反応)	非言語的行動や言語的行動により 示範を示す (音楽作品の伝達)	音楽を感覚的に把握する力 ～かんじる力～ (技能・表現)
第二段階	表現対象の認識 (音楽模倣)	子どもの表現行動に対する応答と 共感	音楽に関わる自己認識 ～わかる力～ (知識・理解)
第三段階	自己表現の伝達 (音楽再現) (音楽表現)	子ども同志が表現を共有できる場 づくり(子ども同士の共感関係づ くり)	音楽イメージの伝達と 表現(表現技術の獲得) ～できる力～ (思考・判断)
第四段階	創造的表現 (音楽創造)	子どもの一人ひとりが集団ととも に表現の創造ができる場づくり (子ども集団の中で、一人ひとり が中心となる場づくり)	音楽創造 (新しい自分の発見) ～つくる力～ (創意・工夫)

(今村、1996)

幼稚園教育要領領域「表現」の内容として次の8項目が掲げられている。

- (1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり楽しんだりする。
- (2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3)様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり自由にかいたりつくったりする。
- (5)いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6)音楽に親しみ、歌を歌ったり簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。
- (7)かいたりつくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり飾ったりする。
- (8)自分のイメージを動きや言葉などで表現し、演じて遊ぶ楽しさを味わう。

これらの8項目の内容を前述した4つの学力に基づき分類すると、次のようになる。

<技能・表現>に関する内容として、

- (1)生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり楽しんだりする。
- (5)いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6)音楽に親しみ、歌を歌ったり簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。

<知識・理解>に関する内容として

- (2)生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。

(3)様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。

＜思考・判断＞に関する内容として

(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり自由にかいたりつくったりする。

(7)かいたりつくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり飾ったりする。

(8)自分のイメージを動きや言葉などで表現し、演じて遊ぶ楽しさを味わう。

＜創意・工夫＞については、該当するものが見えない。

このようにみると、小学校教育における様々の表現活動の基礎となる、音・色・形・手触り・動きなどの表現媒体にたいする基礎的感覚や感性の育成、音や動き・いろいろな素材をもちいての表現の伝え合いの楽しさ、感じたこと・考えたことなどの自分のイメージを表現する自己創造活動が幼児期の表現活動の経験内容となっていることがわかる。

3)留意事項にみる教師の援助観

表現指導における教師の留意事項として、つぎの3点が掲げられている。

(1)豊かな感性は、日常生活の中で美しいもの、優れたもの、心に残るような出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し様々に表現することなどを通して養われるようにすること。

幼児期において表現活動が豊かに展開されるには、幼児の豊かな感性の育成が前提となり、またその感性は他の幼児や教師など人との共有によって養われる。感性は「環境としてのもの」との関わりから育成されるだけでなく、その感動を人と共有することによって自己のものとなる。人との関わりがあってこそ育まれる。教師は、一人ひとりの子どもが得た感動を教師や他の幼児と共有する場を提供せねばならないのである。

(2)生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ表現する意欲を十分に発揮させることができるような材料や用具などを適切に整えること。

子どもの表現欲求を満足させ表現意欲を喚起する為の条件としては、個々の子どもの生活経験の有り様や発達差に応じた教材・教具の使用が望まれる。それによって子どもは、活動に興味や関心を抱く。活動に興味や関心を抱けば活動に集中・没頭する。それによって生来所持している人間としての表現欲求の満足がなされる。それは表現意欲を喚起する源となる。

(3)幼児が自分の気持ちや考えを素朴に表現することを大切にし、生活と遊離した特定の技能を身に付けさせるための偏った指導を行うことのないようにすること。

教師主導型の表現指導スタイルのなかで、教師の望む表現ができることを望んできた教師にとって、子どもの素朴な表現から背景にある子どもの思いを読みとり援助することは至難の業である。しかしながら、幼児期の子どもは生活やあそびなどの総合的活動をとおして、表現活動の基盤となるさまざまな感性とそれを表現するための技術を獲得していく。教師が子どもの思いの表現を大事に受けとめはげまし援助してゆくことは、子どもが生活のなかで表現を楽しむ態度を育成することに通ずる。子どもの思いを無視した大音楽発表会や鼓笛隊などが「特定の技能を身に付けさせるための偏った指導」とみなされ、厳しい指摘がされている。

2. 領域「表現」の問題点と課題

以上、人間の成長発達と表現活動の視点から領域「表現」を分析してきた。ここではそれをまとめておく。また、この要領を基本として教育現場で実践していく上での問題点と課題についても掲げておきたい。

1) 領域「表現」のねらいについて

米国の心理学者 A・H・マズロー (1908-1970) は芸術家の創造性にもとづく芸術創造ではなく一般人が生活のなかで発揮できる創造性(「一次的創造性」)の形成について次のような過程⁴を述べている。Ⅰ.「創造的瞬間(インスピレーション)」(→「選びとる力」)、Ⅱ.「創造的過程」(→「操作する力」)、Ⅲ.「創造的態度」(→「創意工夫する力」)、Ⅳ.「創造的人間」(→「個性ある人格」)。

表現とは、自己実現に向かって新たな自己創造を果たしていく過程であると定義すれば、マズローのいう創造的人間への変革の過程を援用しながら理解すると、より具体的に育成内容が把握できうるのではないだろうか。

(1)豊かな感性の育成に関する項目については、<Ⅰ.「創造的瞬間(インスピレーション)」>と捉え、「人やものとの関わりに注意・集中できる」。(2)表現意欲の形成に関する項目については、<Ⅱ.「創造的過程」>と捉え、「自分の思い入れに基づき、気に入った表現方法を楽しむことができる」。(3)生活の中での様々な表現を楽しむに関する項目については、<Ⅲ.「創造的態度」>と捉え、「様々の表現方法を経験することに喜びを見出すことができる」。とするとねらいをとおしての達成目標が明確になるのではないかと思われる。

なお、<Ⅳ.「創造的人間」>にあたる項目はないが、幼児期の子どもにあっても幼児期の子どもの創造的個性の育成にあたる項目は必要であろう。「保育者や友だちの発想や表現を伝えあうことをとおして新たな表現が生まれることを楽しむことができる。」のような内容がねらいの中に必要である。

2) 経験させたい内容について

社会の変化に対応して、子どもたちが、心豊かに主体的・創造的に生きていくことができる資質や能力として、小学校新指導要領に基づく「新しい学力観」は、「思考力・判断力・表現力」を掲げている。それぞれ3つの学力を獲得することができるための活動内容が必要である。本稿ではこの3つの学力の保障をめざし「技能・表現(かんじる力)」「知識・理解(わかる力)」「思考・判断(できる力)」⁵の観点から内容を分析した。人間の表現行為は「享受」と「表現」とから成り立っている。子どもが経験すべき内容として、様々の表現方法や表現形態の「享受」経験とその模倣や再現としての「表現」活動がある。

「享受」経験は、「技能・表現(かんじる力)」「知識・理解(わかる力)」の学力獲得を可能にし、また、一人ひとりの表現や集団での表現は「思考・判断(できる力)」の学力獲得を可能にする。内容にあるような「楽しむ」「豊かにする」「味わう」等の記述は、何を「享受」し何を「経験」するのかという具体性に乏しく表現指導の内容を曖昧にしてしまう傾向をもっている。活動の目的は、学力を獲得することであり、子どもはその身につけた学力によって何かができるようになるべきである。前述したような内容記述の方法

ではなく“～をかんじる”“～がわかる”“～ができる”というような記述にすると、経験内容とおして獲得させたい学力が明確になり表現指導の曖昧さから脱出できるのではないかと思われる。

また、幼児期の表現活動として「身体表現」「造形表現」「音楽表現」「劇表現」などがあげられるが、そのそれぞれの表現活動の内容とその前提活動となる「享受」活動との連関が十分ではないように思われる。特に学童期以降の造形や音楽の表現活動を支える概念形成（「知識・理解（わかる力）」）の経験内容が不十分で即座に表現活動に流れているのではないかと思われる。

3) 指導上の留意点について

先に、本要領は幼稚園教育の基本として、(1)幼児の主体的な生活を中心に展開されるものであること、(2)環境による教育であること、(3)幼児一人一人の発達の特性及び個人差に応じるものであること、(4)遊びを通しての総合的な指導によって行われるものであること、の4項目を掲げていると述べた。その基本に沿って領域「表現」は、(1)豊かな感性の育成に当たっては、感動を他の幼児や教師と共有し表現することを通して養われるようにすること。(2)生活経験や発達に応じ、自ら表現する意欲を発揮できるような材料や用具などを整えること。(3)幼児の生活と遊離した特定の技能を身に付けさせるための偏った指導を行うことのないようにすること、と述べている。

子どもの主体性は、教師や子ども集団のなかに子ども自身の表現が共有されてはじめて確立される。しかしながら子どもが表現する主体となるための教師の留意点（援助のあり方）としては、次のようなクラスの集団作りが必要である。まず第一に、子ども一人ひとりの個性的表現が教師に向けて、また子ども集団に向けて発揮できるような人的物的環境作りである。第二に、その様な環境のなかで表現される子ども一人ひとりの表現に、教師や子ども集団の応答的関わりがなされることである。第三に、一人ひとりの表現に対する子ども集団の共感的関わり（個々の表現の違いを理解し楽しみ合う関係）が必要である。このような一人ひとりの子どもと教師及び子ども集団との人間関係が成立したとき、子どもは集団のなかで個性的表現をすることができるようになる。

前述した表1にみる子どもの表現行動の各々の段階に基づく教師の関わりが子どもの創造的な音楽表現をもたらし、それはまた子どもたち一人ひとりの個性の開花でもある。そのような子ども像を求めて、教師は人的物的環境を駆使して子どもたちの表現欲求や表現意欲を喚起し、一人ひとりの表現を引き出さねばならないし、また引き出された表現が子ども集団のなかに受け入れられ承認され個性の表現として確立されるように援助をせねばならないのである。また、その時教師自身も創造的個として自己実現が果たせるのである。「表現」にみる留意事項は、そのような具体的な教師の援助のあり方に欠けるとと思われる。

3. おわりに

領域「表現」にみる表現指導観について、ねらい・内容・指導上の留意事項を人間の成長発達及び表現活動の視点から検討してきた。終わりにあたって、これからの表現指導への筆者らの展望を述べておきたい。

今日の子どもをめぐる表現メディアの洪水は、真に自分に合う表現メディアや親しむべ

き文化を見つけにくい状況をつくりだしている。また、子どもの早期教育の低年齢化に伴い知育偏重の教育はますますエスカレートする一方である。そして子どもは一層無気力無感動になる。子どもたちの顔の表情の乏しさ、動きの緩慢さ、声量の減少化、声域の狭域化現象、表現の均一化などは、筆者らが年々憂っている子どもたちの姿である。子どもたちは、「ヒト」としての基本的表現欲求に根差す表現活動からの快感や自分の思いを伝達できる表現手段も知らずに成長するのである。そこには芸術文化を享受する喜びも、友だちと共感し表現しあう喜びもない。このような子どもたちの感性の覚醒と伝達力・自己実現の喜びにこそ今日の表現指導があるべきであろう。

筆者らの今後の課題として、このような表現指導の研究を継続したい。

註

- ¹ 中央教育審議会第一次答申 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(骨子) 文部省 1996
- ² 岸井勇雄 改訂幼稚園教育要領の展開 明治図書 1986
- ³ 千成俊夫 新しい学力観でどう子どもを育てるか 学校教育 NO.921 1994 広島大学附属小学校 学校教育研究会 1994
- ⁴ A・H・マスロー 上田吉一訳 人間性の最高価値 誠信書房 1973
- ⁵ 上掲書3

参考文献

- (1) 藤江充 梅沢由紀子編 表現 福村出版 1993
- (2) 小林美実監修 高野雅子編 表現 保育出版社 1994
- (3) 大庭憲子 うたでなかまと向き合うために 現代と保育 33号 ひとなる書房 1994
- (4) 今村方子 うたを通して子どもを育てる視点の確立 現代と保育 32号 ひとなる書房 1993
- (5) 山口市立東山保育園平成2年度('91) 園内研修資料 “子どもが歌いたくなる環境”
- (6) 今道友信 美について 講談社現代新書 1973
- (7) 保育に生かす教材研究 現代と保育 34号 ひとなる書房 1994
- (8) キース・スワンウィック 野波・石井・吉富・竹井・長島訳 音楽と心と教育 音楽之友社 1992
- (9) 上野ひろ美 幼児教育の原理 高文堂出版社 1990
- (10) 村山貞也 人はなぜ音にこだわるか KKベストセラーズ 1990
- (11) マルコム・テイト、ポール・ハック 千成・竹内・山田訳 音楽教育の原理と方法 音楽之友社 1991
- (12) 今村方子・田中敏夫 保育者養成における総合的音楽力取得をめざすカリキュラムの研究(その2) ~本科での鍵盤学習の実践とその経緯をめぐって~ 山口芸術短期大学研究紀要 第28巻 1997